

## 看護学科の更なる発展に向けて

奈良県立医科大学 医学部長  
喜多 英二 (奈良県立医科大学 細菌学教室)

### Aiming for further development of the faculty of nursing

Eiji Kita

#### 1. はじめに

医学部長として2年間、飯田学科長を初めとして、教授会会員・教員の方々から色々ご教示いただき、看護学の門外漢であった私にも、看護学科の実情のみならず、「看護学」の本質についても少しは学ばせていただきましたことに、心から御礼申し上げます。

皆様方のご尽力で、卒業生の本学付属病院への定着率も年々高まってまいりました。一方で、この2年間に学生の不祥事も少なからず表面化し、医学部長として学内外の方々には深くお詫びしなければなりません。私は2年前の所信表明の中で「学生は本学の宝である」と述べ

ましたが、この2年間の医学部長職を通して、この想いを一層強く感じる様になりました。これからは看護学科の学生の生の声を聞く機会を出来るだけ多く持ちたいと考えております。同時に、教授以外の教員の方々とも直接お話しできる機会が少なかったことも、非常に残念に思っております。

そんな折、幸いにも看護学科紀要に寄稿するチャンスを与えて頂きました。看護学科の更なる発展に向けて、皆様方と共に歩みだす出発点になればと願い、紙面をお借りして「看護学科」への思いを述べさせていただきます。

## 2. 「看護学」教育実践に向けて

医師と異なり看護師には複数の養成ルートが存在していますが、国の看護系大学化推進計画により看護系大学数は急速に増加し、現在では医科大学数を遥かに上回っております。単に看護師の数を増やすだけなら看護師養成を大学に委ねる必要はないのであり、この計画は「質の高い看護師養成」を目的としており、サイエンスとしての「看護学」修得の必要性を求めていることでもあります。これからの大学教育が目指すのは、1) 主体的に考え、行動ができ、急性期医療から地域医療まで看護を提供できる能力、2) チーム医療の調整役として必要な高度なコミュニケーション能力、3) 看護専門職としての自発的な能力開発を継続するための素養、4) 看護の向上に資する研究能力などを備えた看護師の育成であります。

医学・医療は生命科学の研究成果を基盤に著しく発展し変化し、看護の分野もその影響を受け変化し、看護技術の進歩に留まらず、サイエンスとして学び研究する学問として「看護学」が体系化され今日に至っております。こうした中で、本学看護学科の教育目標には、1. 看護実践能力の継承発展、2. 豊かな心の涵養、3. 国際感覚の育成、4. 医学教育との連携、5. 地域社会への貢

献が謳われ、「看護学」を修め将来は看護の指導者となれるような人材の育成・輩出を使命とする「看護大学」であることを宣言しております。

現状では目的とする教育実践に、教員数の不足に加えて、教員の質の維持・向上等、多くの問題が存在しております。しかし本学のみならず、程度の差はあれハード面、ソフト面共に満足できる大学が存在しないのも実情であります。これは医学科も同じであります。これは他学の状況を羨んでいるだけでなく、現況で如何に稔りある教育・研究を実践するかを考えることを最優先すべきであります。各教員には、本学が単なる看護教育の場ではなく、「看護学」を体系として教育・実践する場であることを自覚し、現状下でも最大限努力する決意こそが、本学の教育目標達成の礎であることを認識して頂きたいのです。

## 3. 人こそ全て

前学長吉田修先生は、退任挨拶（学報24巻、平成20年）の中で、「大学は人です。端的に言えば、いかに優れた教授を選ぶかで大学は決まります。それにはひたすら本学の現在と将来のために誰がベストかを考えて選ぶべきで、個人的、感情的、非論理的要素はすべて排除して掛からねばなりません」と、述べられていま

す。看護学科は講座制ではないが、各科目における教育・研究の全てを統括し実践する責任は主任教授にあり、学科の運営は教授会メンバーの総意に基づき行われております。もちろん教授陣だけで「看護学」教育は達成できず、教授の指導の下で個々の教員が協調し合いながら教育・研究を実践していくものであります。従って、教授の資質・力量が「看護学」教育・研究の実践において大きな鍵となり、他の教員の教育・研究意欲に多大な影響を及ぼすのであります。チーム医療の重要性を説きながら、教員間に不協和音が存在することは、学生諸君の学習意欲や母校愛をも喪失させ、卒業生の本学附属病院への定着率低下を招くこととなります。

教授は、学生だけでなく若い教員を愛情豊かに指導・育成し、教員間の協調性を高め、より良い「看護学」教育の実践を目指さなければなりません。同時に彼らの研究環境を整え、研究意欲を高めることで、彼らがサイエンスとして看護教育に携れるように努力する責務を負っております。若い教員の方々が教授の熱心な指導をパワハラと感じず、心豊かに安心して教育・研究に専念できれば、本学看護学科の更なる発展につながり、奈良医大にとって将来豊かな稔りとなります。「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、

仇は敵なり」は、大学においても教室運営の基本ではないでしょうか。教授は、個々の教員の力や特徴を掴み、彼らの才能を十分に発揮できるような体制作りを心がけ、本学に根付き将来を担う教員を育てる決意を持ってください。

#### 4. 「看護学」大学であること

看護師国家試験においては、専門学校でも大学に近い合格率を保っています。大学である意義は、「看護学」教育の実践であることと云うことに尽きるでしょう。大学教育が専門学校等での教育と大きく異なっているのは、人格形成であるとか、人間的な考え方、開発能力、自己判断能力等が、4年間のカリキュラムに全て組み込まれており、看護師としての人間的素養の熟成にも重点が置かれていることだと思えます。看護技術的なことを教育するだけではなくて、将来伸びていくための基礎的なものを全部含めた形での包括的な看護師教育を目的としており、大学で学ぶ意義というのはまさにここに集約されていると考えます。大学は、チーム医療のリーダーや調整役になり得る人たちを、育成し輩出しなければなりません。

医学科同様、指定規則のカリキュラムの科目数も多くなり、今日の教育内容は非常に過密化し、新カリキュラムにおいては、今まで

卒後教育で課せられていた技術的な側面の多くが学部生の間に習得することが求められております。長年医学教育に携ってきた経験から、学生は座学で学ぶことよりも、実習・実技習得を通して多くのことをより積極的に自ら学ぶものであり、自らの頭で考え解答を導き出す自己判断能力をも高め得るものだと思います。大学は学生達に知識を詰め込む教育を施すのではなく、自ら学び・体験する姿勢、問題点を見出し・解決する意欲を導き出す教育を実践しなければなりません。学部生の中にこのような姿勢・意欲が身につけば、さらに「看護学」をサイエンスとして深めるため大学院への道を選択する学生も増加すると期待されます。

今の若者達の特徴は、用意されたカリキュラムを機械的に消化することには長けていても、与えられた課題の意義を自ら思考し疑問点を探りあて、それを解決しようとする積極性に欠けている点であります。高校時代迄とは何が違うかを十分に把握させる指導をしているか、国試に合格できる知識だけを一方的に与える教育内容・方法になっていないか、我々はもう一度自らの教育内容・方法を見つめ直すべきではないでしょうか。重要なことは、これはカリキュラムの問題ではなく、教育のあり方の問題、心の通

った教育を施す意欲の問題なのであります。

幸いにも本学看護学科には、医学科並びに附属病院が併設されております。医学科との教育・研究における交流や、附属病院での学生実習、看護師との交流など、他学にはない利点を教育・研究に大いに活用することで、人間的素養の涵養とサイエンス志向の看護学生の育成を図れば、「看護学」大学としての存在感を一層高められるものと信じております。財政難の状況下でも、このようなソフト面の充実は可能であります。何よりも「人と人の心の通い合う交流・相互理解」こそが、学生・教員の本学への愛情を高める優れた処方箋であり、明日の「看護学」大学を築く土台となることをご理解ください。

##### 5. 真の「看護学」大学に向けて

本学が「看護学」大学として更に発展し、より多くの優秀な学生を確保するための第一の課題は、新カリキュラムに対応できる教員の補充、施設の充実、学外施設との協力体制補強等、教育体制の問題を解決することです。私は医学部長として、出来る限りの補強に取り組んでまいりますが、現在の財政状況下で実現範囲には限りがあるのも事実であります。既に理事長は、施設面での補強や非常勤教員の増員等を表

明されております。重要なことは、如何に施設が整いスタッフ数が充足されていても、教員各自の「看護学」教育への熱意・大学教員としての自覚無しには、良い教育実践が叶わないことです。

もう一つの喫緊の課題は、大学院設置であります。「看護学」大学としての発展には、「看護学」をサイエンスとして取り組むための専門的研究の場を学生達に用意しなければなりません。近年、看護学領域においても、大学院志向の学生も増え、専門看護師の資格を得るにも修士課程を修了する必要があります。本学では、平成24年大学院設置を中期計画目標に掲げております。この計画実現に向けて、各教員は大学院教員として認証されるよう研究を発展させ、その成果を積極的に英語で公表して下さい。十分な数の研究指導教員・研究補助教員を確保できるよう一致団結し、また大いに医学科との連携を強め支援を仰いでください。大学院設置は、受験生・学部学生の眼には、本学が「看護学」大学として真に魅力ある大学として映ることでしょう。更には、本学教員にとっても教育・研究に専念するに相応しい場として、大きな誇りになると考えます。この目標に向けて、医学科も全面的に協力していく所存であります。

これら二点の目標達成に向け

て、私は本学役員の一人として最大限の支援を果たす覚悟でおります。皆様方におかれても、財政問題はあるにせよ、各自の「大学教員」であることの自覚と教育・研究への熱意無しには、真の「看護学」大学としての発展が望めないことを、十分にご理解下さい。

## 6. おわりに

本学が直面している財政事情の下で、本学は「大学」としての使命達成において、極めて厳しい現実におかれております。しかし、どんな状況下にあっても、各自が大学教員としての自覚を強め、より良い大学に発展させようと努力する気構えがあれば、必ず目的は達成されるものと、私は信じております。皆様と一緒に「看護学」大学発展に向けて、最大限力を尽くすことをお約束して、本稿を終わらせていただきます。

## 謝辞

本稿執筆の機会を与えて下さった看護学科紀要編集部会長の瀬川睦子教授をはじめ、編集部会の先生方に深謝いたします。